

提言

まもなく日中国交樹立二周年を迎える。この二周年には、北京—東京間に一番機が飛ぶ。

まずは慶慶の至りである。今日のように、周恩来休閣に驚りが見えてくると、あるとき、時の勢いで国交樹立を成しておいてやはりよかったといえるのかも

提言 されない。だが、その代価としての日台断絶があり、日台航路が閉鎖されてしまった以上、喜

びは中くらいなり」といっつわらざることをた。 そういへば去る八月二十八日付朝日が、日中間に一番機が飛ぶのに当面は採算がとれず、中国へ自由に行かれるわけでも

ないから、日中空路が実現しても「喜びは中くらいなり？」と見出しで八段ぬきの記事を載せていた。おおかたの読者からすれば、今になってなにをかいわんやの感があるうが、こんなことは、最初からわかりきったことだったのである。そのよう

ど、「論語」の値打ちが高まるように思われてならない。「子曰く、ただ女子と小人とは養い難しと為す」という有名な一句などは、なんと味わい深い至言であることか。中国では、いま、政治の要請から孔子を批判しているのだが、彼らが孔子の

愚かな女性がいるものと信じてきた自虐フェミニストであるが、参院選に示されたわが国女性の投票行動や女性と政治のもろもろの關係などをみていると、やはり孔子のいうとおりかもしれないと思う。右の孔子の一句は、さらに「これを近づくと

みると、どうも日本は、「女子と小人」に墮してきたきらいなきにしもあらずであるだけに、中国側に侮られることのないよう、男子としての民族的な矜持を保ちたいものである。もとより、そのような民族的矜持とは最近の日韓關係に関して宇都宮徳島氏のように、「なぜ日本が謝らねばならないのか。日本に住んでいたといっても犯人の文世光は韓国人だ」(『日経』9月12日付)とわめきちらすような「民族的矜持」では決してない。

賛「日中国交二周年」

に乗ってきたのだとしたら、今後の日中關係にも不安の種はつきまない。この二年間をふりかえってみても、日中關係の基本がまだまだ認識されていないと思われ、事例が多すぎるように思う。

言葉を永年にわたって血肉としてきた民族であることを忘れてはならない。うっかり尻馬に乗って喜んでいると、そもそも日中關係におけるわが国の立場などは、「女子と小人」の立場ではないかと、中国側は内心軽蔑しているかもしれない。

筆者は、女性にも賢い女性と怒みは浅ましい。 日中關係を歴史的に回顧して

対中態度とは打って変って、反射的にこのような姿勢を示す人物を、中国では古来、小人と

7
1
49
9
25